

「三々な経営」連載終了報告会の感想③

企業経営漫談士 岡野実空

続編「心技体」の最後は、「体」。これまで本編では、人間の体に当たる企業の「組織」論を、さまざまな切り口から展開してきました。各社の報告会でも、それらは話題の中心でしたが、肝心の「戦略」とセットになった議論は非常に少なく、次代を担うミドルの発言として、もの足りなさを感じました。

今回のコラムは、経営の「機能」「サイクル」「風土」の側面から、現代の「戦略」に適合する「組織」のあるべき姿を再度確認し、一連の報告会の総括とします。

その1: 「壁」の低さ

科学の進歩によって、次々と更新される人体に関する知見。中でも従来、脳に集中していると考えられていた身体の制御機能が、実は各臓器の有機的な関係によって保持されているという事実は、私たちに驚きとさまざまな示唆を与えました。それを経営に当てはめれば、「大きな本社」からの指示待ちでは、企業が生き残れないということ。すなわち「小さな本社」発の方針に基づき、各部門が専門機能を十分に発揮するだけでなく、お互いが小まめに助言しあい、俊敏に連携して最大の成果に結びつけるという「ワン・チーム」の行動です。

そこで絶対に必要になるのは、部門や個人を隔てる「壁」の低さ。前回のまとめにも書いた通り、日常のコミュニケーションをつうじて「大疑」をぶつけ合うために、まずお互いをよく知ることの重要性です。時節柄、若手の忘年会「スルー」が話題に上っていますが、それは各組織がその風土に合わせ、通年取り組むべき課題に他なりません。

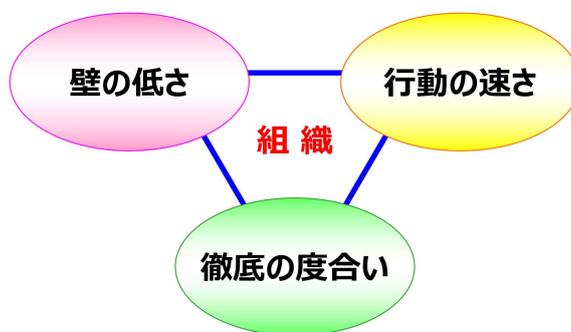
その2: 「行動」の速さ

上記の改善は好例ですが、企業人に不足しているのは、自らの迅速な「行動」変容。その一端は、彼ら彼女らの「思います」という日常発言の語尾に現れます。すなわち、自ら「～します」とは言い切らず、絶えず逃げ道を作っているのです。しかもその大半が無自覚だけに、さらに重症といえます。

自らの「行動」を変えるのに、一番労力を要しないのは、気づいたその時。翌日やろうとすれば、直後の倍のエネルギーが必要。翌々日はさらにその倍で、幾何級数的な負荷は結局変えないことにつながります。ましてそれが他人を巻き込むことなら、なおさらです。

二進も三進も行かなくなると、最後に火事場のバカ力で乗り切るのは、我が民族の得意技ですが、激動の時代に取り残されないために、「いま」「ここ」「自分」が改善できることから、「速く」「行動」を起こしましょう。

Z-3 報告会感想・その3 「体」(組織)



その3: 「徹底」の度合い

発刊以来四半世紀経ち、いまなお企業人のバイブルの一角を占める、『ビジョナリーカンパニー』。その「時代を超える生存の原則」の事例として登場する優秀企業間で、「優」と「秀」を分けるものは、あるべき姿に向かう考え方や行動の『徹底』度合。どこの会社も似通った「理念」を掲げ、同じ土俵で勝負せざるをえないという厳しい世の現実を見るにつけ、「やるべきこと」「やってはならないこと」の『徹底』は、極めて重要な差別化ポイントです。

その意味で、続編初回に強調した「自掃依」「法掃依」が、二回目のまとめ「大悟」に至るか否かは、仏教・経営ともに、組織的な「大疑」の『徹底』にかかっているといっても過言ではありません。

私たち日本人のものの考え方に、これまで最も影響を与えてきた「仏教」。その中心にあるのは、「平等」という人間観。組織に存在する上下や差は、所詮「役割」「責任」の違いによるものに過ぎません。グローバル化の弊害に悩む現代社会において、多様性を許容し、多くの人を救うことができる思想は、現在のところ「仏教」以外見当たりません。また人の集団である「組織」を、正しい目的に向け「経営」する思想も同様です。今回の一連の報告会は、それを確認する巡礼の道となりました。合掌!!

2019年12月16日 実空